

五郎時致

天保十二年七月

作詞

三升屋三三治

作曲

十代目 杵屋六左衛門

(本調子)

いさる程に、曾我の五郎時致は、俱不戴天の父の仇、

討たんずものと撓みなき、彌猛心も春雨に、

濡れて廓の化粧坂、名うてと聞きし少将の

(出合方)

雨の降る夜も雪の日も、通ひく〜て大磯や

(合)

廓の諸分のほだされ易く、誰に一筆雁の傳て

野暮な口舌を返す書

粹な手管につい乗せられて

浮気な酒によひの月

(合)

晴れてよかろか晴れぬがよいか

(合)

兎角霞むが春の癖

いで、才オそれよ、我も亦

(合)

何時か晴らさん父の仇、十八年の天つ風、

いま吹き返す念力に、遁さじ遣らじと勇猛血氣、

その有様は牡丹花に、翼ひらめく胡蝶の如く

(合)

勇ましくもまた健気なり

(二上り)(合)

藪の鶯 気ままに啼ひて

(合)

羨ましきの庭の梅

(合)

あれそよ〜と春風が、浮名立たせに吹き送る、

堤の菫鶯草は

(合)

露の情けに濡れた同士、色と戀との實くらべ、

實浮いた仲の町、よしやよし

(合)

孝勇無双の勲は、現人神と末の代も、

恐れ崇めて今年また、花のお江戸の浅草に、

(合)

開帳あるぞ賑はしき

